

平内左衛門はなきか、行向ひて事の仔細を尋よかし、伊賀平内左衛門家仲は、木蘭地に色々の糸をもて、獅子に牡丹ぬひたるひた、れ、こしあて、小ぐそくばかりにて、郎等二人にはら巻させ、はし船にとり乗り、熊谷が使の船におし向て、事のやうをぞ尋ける、

〔源平盛衰記 四十二〕屋島合戦事附玉蟲立扇與一射扇事

越中次郎兵衛盛嗣が熊手ヲ以判官ヲ取ントシケルヲ大將軍○義ヲ懸サセジトテ、續テ游セタ

リケル程ニ、事由ナク上リ給タリケレバ、盛嗣判官ヲ懸外テ、不安思ヒ、游艇ニ乗移、指寄テ宗行小

林ガ甲ノ吹返ニ、熊手ヲカラト打懸テ、曳音ヲ出シテ引、

〔高倉院嚴島行幸記〕廿一日、○治承四年三月さるのときに、高砂のとまりにつかせたまふ、よもの舟ども、

碇おろしつ、浦々につきたり、御舟のあし深くて、湊へか、りしかば、はしふね三ぞうをあみて、

御輿かきすへて、上達部ばかりにて、御舟は奉りし、○中廿六日、○中むまの時に、宮島につかせ給、

○中しほひくほどにて、御所へ御舟いらねば、はし舟にてぞおりさせ給、

〔萬葉集 古十一〕相聞往來歌、寄物陳思

湊入之輩、別小舟障多見、吾念公爾不相頃者、○カモ

〔新千載和歌集 十一〕後宇多院に十首歌講せられけるに、寄船戀、侍從爲親

うきながらよるべをぞまつ難波江の蘆分を舟よそにこがれて

〔今昔物語 三十一〕越後國被打寄小船語第十八

今昔源ノ行任ノ朝臣ト云フ人ノ、越後ノ守ニテ其ノ國ニ有ケル時ニ、□ノ郡ニ有ケル濱ニ、小

船被打寄タリケリ、廣サ二尺五寸、深サ二寸、長サ一丈許ナリ、人此ヲ見テ此ハ何也ケル物ゾ、戯レ

ニ人ナドノ造テ、海ニ投入タリケルカト思テ、吉ク見レバ、其ノ船ノ鉉一尺許ヲ迫ニテ、梶ノ跡有

リ、其ノ跡馴杭タル事无限シ、然レバ見ル人現ニ人ノ乗タリケル船也ケリト見テ、何也ケル少人